

西側の“言論の自由”というお笑い草

By Finian Cunningham

January 10, 2015 (Information Clearing House)

今週のフランスでのテロ殺人のあと、エリゼ宮の外に立って演説したニコラ・サルコジ前大統領は、この野蛮行為を“文明への攻撃”だとして非難した。髪を整え、日焼けし、粹な身なりのサルコジの厳かな言葉は、彼を文明の化身のように見せた。

これは戦争犯罪のみならず、低俗な腐敗を暴かれて泥まみれの政治家による、奇妙な礼節ある言い回しだ。

サルコジは、彼と彼の英国の盟友が、2011年3月に、国連の指令を踏みにじて NATO のリビアへの爆撃キャンペーンに加わったとき、“文明”などにあまり関心を持たなかった。

あの7カ月の攻撃の結果、リビアの指導者ムアンマル・カダフィは背中を刺されて殺されたが、そのカダフィから、サルコジは秘密の政治献金を、過去に喜んで受け取っている。

この不法な、リビアへのフランス主導の NATO の電撃作戦は、アフリカでも最も経済的に発展した国の一つを破壊し、それは今も続いている。リビアは略奪されて国家としては崩壊し、過激派の Takfiri 民兵団と部族の軍閥によって踏みにじられた。彼らの歪んだイデオロギーは、シリアとイラクを破壊している ISIS のテロ・ネットワークに共有され、この同じネットワークに、今週パリを襲って十数名を殺した武装した信奉者も含まれている。

だから文明への攻撃に対するサルコジの懸念は、大いに限定的なものだ——ただ、思想統制された西側メディアは、そんな言い方はしていないが。リビア国家を不法に転覆させて彼が解放放つことになった、きわめて極端な過激軍団が、先日、まさに彼の共和国の首都で、彼自身の人民を殺したのである。

この事件で踏みにじられたことになっている、西側文明の想定された基準の一つは、“言論の自由”と“表現の自由”である。サルコジに同調したのは、オバマ大統領から英首相デイヴィッド・キャメロンに至る西側の首脳で、彼らは、パリに本拠をおく風刺雑誌「シャルリ・エブド」への殺人襲撃を、“我々の価値”への戦争だとして非難した。

この雑誌は以前に、予言者モハメッドを冒瀆する絵を発表して、世界中の何百万のムスリムを激怒させた。それが、これら銃撃犯たちの動機になったと信じられている。彼らは逃走中に「予言者のために復讐した」と叫んだからである。

フランス大統領フランソワ・オランドは、殺されたジャーナリストと漫画家を、言論の自由という高遠な原理のために死んだ“英雄”だと宣言した。

しかし、人権のような他の西側の想定された価値と同じく、言論の自由はひどく過大に評価された原理で、これは、自分たちを特別扱いし、他より優れた者とする、名誉のイデオロギー的しるしとしてこれを持ち出す、西側政府や、統制された企業メディアのような機関によって過大評価されている。

しかし現実には、このような西洋の諸価値は、見せかけ以上のものではない。それは空虚なスローガンで、その単なる擁護や、そのうぬぼれた不正直な公言は、プロパガンダを目的としている。

サルコジやキャメロンやオバマが、リビアの破壊を横目で見ているとき、彼らはどんな人権を尊重し、どんな法への敬意を持っていたのだろうか？ あるいは現在進行中の、シリアやイラクの密かな破壊の場合には？（西側が、もともと彼らがシリアの政権転覆のために作りだしたテロ・ネットワークを、解消すると公言したにもかかわらず）

西側政府が言論の自由を支持する限り、それはほとんど、その場限りの政治的利益のためである。それは彼らが主張する普遍的原理ではない。しかも滑稽なことに、彼らは絶えず堂々と嘘をついて、主張とは反対のことをやっている。

フランスの風刺出版社は、イスラム教を貶めることは許されたかもしれない。しかし、シオニズムと、その証明可能な犯罪行為を非難することが許されることは、決してないだろう。問題のこの雑誌が、サルコジやオバマやキャメロンが頭に爆薬を結びつけていたり、リビアに爆弾を落としていたりする漫画を刷ることはあるまい——後者は風刺でなく、犯罪行為の現実をそのまま写しているにもかかわらず。

そういうわけで西側の“言論の自由”は、実は権力者が、その政治的利益を伸ばすために西側が名指す者を、誰であれ、貶め悪魔化するための自由にすぎない。言論の自由が合法的に西側の利得を攻撃し、その偽善と詐欺行為を暴露するときには、それは“普遍的原理”であることを止める。検閲がそのとき鉄壁の秩序となる。

たとえば、フランスのコメディアン Dieudonné は、Quenelle (クネル) と呼ばれる滑稽な腕のジェスチャーをしたために、フランス政府から公演を禁じられた。このジェスチャーは、下品な個人的侮辱から支配階級への嘲笑に至る、いろんな意味に解釈できる。フランス政府はこれを“反ユダヤ”で、逆にしたナチの敬礼だと言った。ディウドネはこれを否定し、このジェスチャーは“反シオニスト”で“反体制”だと言っている。

このコメディアンは、彼の政治的パロディのために、ロンドン当局からイギリスへの渡航を禁止された。彼の友人でプロサッカー選手のニコラ・アネルカは、昨年、ゴールを決めたときに“クネル”の格好をしたために、イングランドでサッカー試合に出ることを禁止され、10万ドルの罰金を食らった。

今週パリでのシャルリ・エブド雑誌社での虐殺のほとんど1年前に、オランダ仏大統領は、ディウドネであれ誰であれ、“クネル”を実行した者に対しては寛容の余地はないと通告した。「滑稽な格好をするつもりで、実は職業的反ユダヤ主義のからかいの態度に対しては、我々は戦う」と言った。

しかし、ちょっと待った！ それは、フランスの支配階級による、ディウドネの“クネル”の解釈ではないのか？ 彼らの偏見を根拠に、公衆の面前でこのジェスチャーをする者は誰でも起訴されることになる。これは検閲どころではない。意見を持つ者への国家の迫害である。

イスラム教を侮辱することは、西側の選んだ言論の自由によれば、許されるようだ。なぜならそれは、イスラム諸国を悪魔化する彼らの政治的アジェンダに一致するもので、西側の戦闘機や、テロリスト傭兵を密かに用いて、ムスリムを攻撃することが容易になるからだ。しかし、シオニズムや西側の支配階級を風刺することは許されない。

そしてここにもう一つ、問題を明らかにする事実がある。なぜ Press TV (イランの国営英語ニュース・テレビチャンネル) が禁止されて、イギリスの地上及び衛星テレビ放送から締め出されたのだろうか？ なぜイランを本拠とするチャンネルが、ヨーロッパと北米全域で禁止されたのだろうか？ その場合、西側の言論の自由はどこへ行ったのか？ 何が問題なのか？

Press TV は寛容の対象でなかった。それは追放された。その理由は、サルコジ、オランダ、オバマ、キャメロンのような人たちが行っている、西側の国家テロの実情があまりにも耐えられないもので、一般大衆が目覚まし、世論が高まってはいけなからだ。ジェノサイドを行うイスラエル政府が実行する、西側に援助された国家テロの真実はあまりにも耐えが

たく、一般の議論には向かない。どんな批判も、“反ユダヤ主義”という怪しげな口実のもとに、記憶の穴の底に押し込まれる。西側のリーダーたちは戦争犯罪で起訴されるべきだという事実は、あまりにも耐えがたい。こうした見方のすべては、いかに知的で厳格で、道徳的に良心的で、法的に根拠が確かであっても、検閲を受けなければならず、これをはっきり口に出す者は孤立へと追いやられる。

西側の言論の自由は、権力をもつ者たちが、その不法な地位を維持するための、皮肉な言葉の遊び以外の何ものでもない。

西側の戦争犯罪人たちが、ムスリムたちを非人間化するために擁護する風刺雑誌が、“英雄的”と呼ばれる。一方では Press TV のような情報に満ちた、真面目なニュース・チャンネルが禁止される。これこそお笑い漫画ではないか。

(フィニアン・カニンガム—1963年生まれ—は、国際問題について広く書いており、数か国語で発表された論文がある。彼は農業化学の修士課程を卒業し、新聞記者になる前は、英国ケンブリッジの王立化学協会の科学編集者を務めていた。)